

史談

2008 (H20) 8・5

■ あいさつ

白鷹町史談会会長 江口儀雄

来年のNHK大河ドラマが「直江兼続」と決まり、人々は俄然色めきだち、「白鷹に直江兼続の足跡がないか」との問い合わせが殺到した。明解な答を出せなくて、私の方が戸惑った。

直江兼続は米沢松カ崎城の城主として、国境にある城の整備に取りかかる。兼続の臣、中津川彦七が荒砥城に入り、早速、城を整備して八幡神社の社殿の修繕を試みた。慶長五年秋、徳川家康と豊臣勢を率いる石田三成との関ヶ原の戦いがはじまり、天下は騒然となった。一方、東北においても徳川方に組した最上義光と、豊臣方について上杉景勝によって最上戦争がおこった。

上杉の総大将直江兼続は二万の軍勢を率いて敵地に向かった。はじめに畑谷城（山辺町）を攻撃しようと間道を探るのに、荒砥城の守護神である御楯稲荷神社に参拝した。稲荷神社の眷属の白狐が直江軍を先導し、畑谷城の裏門に至った。畑谷城主江口五兵衛は不意をつかれ、落城してしまった。白狐の導きで勝利を勝ち得た。後に狐が通ったこの道を狐越街道と呼ぶようになった。

八乙女八幡神社の神官であった菅間家にある「沿革略記」の記事である。先輩諸氏の学究の成果を受け継ぎながら、新たな研究を展開していきたいと考えている。

■ 深山観音堂の屋根の葺き替えが間もなく始まります。

見学の際は係員の指示に従い、ケガや事故のないようご注意ください。お問い合わせは教育委員会まで。

■ 今年度の事業について

さる6月9日、今年度の史談会の総会が開かれ、平成19年度の事業報告と収支決算報告、20年度の事業計画と収支予算案が承認されました。

今年度の主な事業としては9月に鮎貝・蚕桑地区の文化財めぐり、11月には研究発表会、また「史談」の25号と会報を年数回、発行する予定です。

今年から来年にかけては直江兼続があちこちで話題になりそうですが、ここでも11月に米沢から講師をお招きして話を伺うことになっています。ぜひご参加ください。

■ 8月15日 終戦の日に。

戦前、この白鷹町にも監視哨があり、その一部が今も残されています。米軍の飛行機を監視するのが目的で、24時間体制だったそうです。終戦の日を機会に、数少ないゆかりの場所を訪ねます。

- ・期日 8月15日
- ・時間 11時
- ・集合場所 長井線荒砥駅
- ・参加費 1000円 おにぎり代など
- ・申し込み 菅原写真館 85-2057
- ・定員 20人ほど

■ 「会報」に情報の提供を

私たちのまわりには毎日さまざまな事が起こりますが、気をつけていないとつい見落としてしまいます。まして今は変化が激しい時代ですから、日々の忙しさにかまけて、いつのまにか忘れてしまっていることが多いものです。

衣食住の変化や冠婚葬祭の変化は特に激しく、特に注意する必要があります。めずらしい話や驚いた話などをお知らせください。また、ささいなことの中にも考えるきっかけはあるものです。たとえば、地名や苗字、身のまわりの木や草の名前はいくつ言えますか。鳥や虫の名前はどうか。おためしを……。 (川)

■ 遠い夏

燃えるような暑さの中をとぼとぼと歩いてきた。キャンディを作っている丸福、そして多田医院の前を通過して、弁天町から金鐘寺に抜ける細道で井戸の水を飲んだ。とてもうまかった。寺の前から三番坂を下り、松川で水浴びをした。上級生は鉄橋のピンヤに上がって飛び込んでいたが、足がすくんでピンヤには上がれなかった。水の流れに乗って荒砥橋の近くまで流れていった。川の水に浸っているだけで楽しかった。

『路傍の石』の吾一が鉄橋で汽車に遭遇した危機一髪を思うと、恐ろしい所に思えた。ピンヤの周りの深みでは時折アッパを食って、鼻の奥がキーンとなって涙が出た。水浴び帰りの坊主頭に容赦なく太陽が照りつけ、辟易しながら水の飲める井戸だけを頼りに歩いていた。手拭いをだらしなく引きずっていたような気がする。共済組合の井戸の水は、へこたれた少年を元気にさせた。

弁天堂をめぐるように流れている称名寺川が石でせき止められ、その一角が水泳ぎの格好の場所であった。餓鬼大将を先頭に集まってくる子供たちは、泳ぐ前に川底の石を百個拾い上げないと泳げなかった。いくらかでも深い遊泳場にするのも、子供たちの共同作業であった。唇が紫なるまで泳いだり、水をかけあって遊んだ。

川の浅瀬で小魚を捕獲するために、魚を追い込むように石を積む土木工事も行われた。炎天下で頭がくらくらする中で、魚を追って捕獲するのも餓鬼大将が指示した。獲物は平等に分配され、夜の食卓に載った。また、水鏡をのぞきながら、川底の動く石をはがして川上にのぼって行く。石の間から顔を出している鰻の頭が馬鹿に大きく見えた。ヤスを突き刺すまでの瞬間がドキドキする。やや大きなガンバチと呼んでいる鰻を突いた時の快感は格別であった。柳の枝に鰻の口とあぎとを通し、収穫は一目瞭然となる。あぶって醤油をつけて、また唐揚げにして食べた。この味は私を豊かにした。

(江口儀雄)

■ ウルシかぶれ

このところウルシに「かぶれ」ている。と言っても「ウルシかぶれ」、つまり、いわゆる「ウルシに負けた」のではない。ウルシの木が気になってしかたがないのである。特にここ数十年の間に植えられ、かつては漆掻きの対象になったであろうウルシの木が今どうなっているかが気になる。どこにどんな姿で立っているかが気になるのだ。

子どものころから毎年のように「ウルシかぶれ」になった。学校が夏休みになると松川に水浴びに行くか、カブトムシ取りに「やぶこぎ」が遊びの中心だったから「かぶれ」ないのが不思議なくらいで、いつの間にか目のふちや耳たぶや首の周りが赤くなり、かゆくなっていた。

特にひどいのが陰部で、先が膨れるだけでなく、用を足すたびにしみで大変だった。母は決まって「また負けてきたが・・・」と言いながら顔をしかめていた。

薬といっても置き薬の軟膏ぐらいしかない。医者に行くほどのことでなく、ただじっと我慢して、日がたつのを待つしかないもわかっていた。そんなある日、母は「栗の木の皮が効く」ということを、どこかから聞いてきた。

近くの山に行って鉋で栗の木の皮をはいできた。東ねて風呂にいれ、生くさい木の皮で痒いところをこすったが、いっこうに痒みは止まらなかった。数日後、母は「どんじょのヌルヌルが効く」という話を聞きつけてきた。今度は川に行行ってドジョウを取ってきて、台所の板の間に寝て、赤くぶつぶつのできた腹の上にドジョウを転がした。腹の上で冷たいドジョウがうごめき、くすぐったくて体を動かすのでドジョウは腹からすべり落ちた。逃げるドジョウを捕まえては、また腹の上に乗せた。しばらくするとドジョウも元気がなくなり、ヌルヌルしなくなった。手も腹もすっかり生くさくなったが、効き目のほどはわからなかった。

当時、「ウルシに負けた」といったのはウルシの仲間の「ヌルデ」という木だったことは最近になって知った。

(丸川)